

コロナ禍の大学生生活経験に ついての調査

—2020年度入学生に着目して—

京都大学高等教育研究開発推進センター
教育アセスメント室

調査の概要

- 調査目的: 2020年度4月以降, 多くの大学で, 新型コロナウイルス感染症予防の一環として, さまざまな活動制限が実施され, 学生は通常とは異なる学生生活を経験することとなった。特に, 2020年度入学生においては, 高校卒業後すぐコロナ禍を経験しており, さまざまな調査で, 他学年と異なる傾向を示している(全国大学生協組合連合会, 2021, 2022)。そこで, 本調査では, 2020年度入学生を対象に, コロナ禍における大学での学びや学生生活がどのように経験されたのか, そしてそれらが大学生にどのような影響を与えたかを明らかにすることを目的とした。

■ 調査方法

- 調査形態: オンライン調査(アスマーク株式会社に依頼)
- 調査時期: 2022年3月11日(金)~3月13日(日)
- 調査対象者: アスマーク社のモニター登録者のうち, スクリーニング項目に, “大学生(4年制・6年制)”, “2020年入学”と回答した者のみを対象とした。
- 実際の調査対象者数: 600名(男性: 269名, 女性325名, その他6名)
- 提示された項目のすべてが必須回答と設定されていた。

回答者属性についての結果

- 回答者属性についての項目：大学1年生の時（2020年度）の通学や課外活動の状況、所属学部の規模や志望理由、卒業後の進路希望、入学前の大学生活に対するイメージを把握するために設定した。

■ 選択式

■ 性別

- 大学1年生の時（2020年度）の居住形態（複数あった場合は最も過ごした時間が長いもの）

■ 大学1年生の時（2020年度）の通学時間

■ 大学1年生の時（2020年度）の通学手段

■ 大学1年生の時（2020年度）に部活動やサークル活動に従事できたかどうか

■ 大学1年生の時（2020年度）にアルバイトに従事できたかどうか

■ 所属学部の1学年の人数

■ 所属大学・学部の志望理由

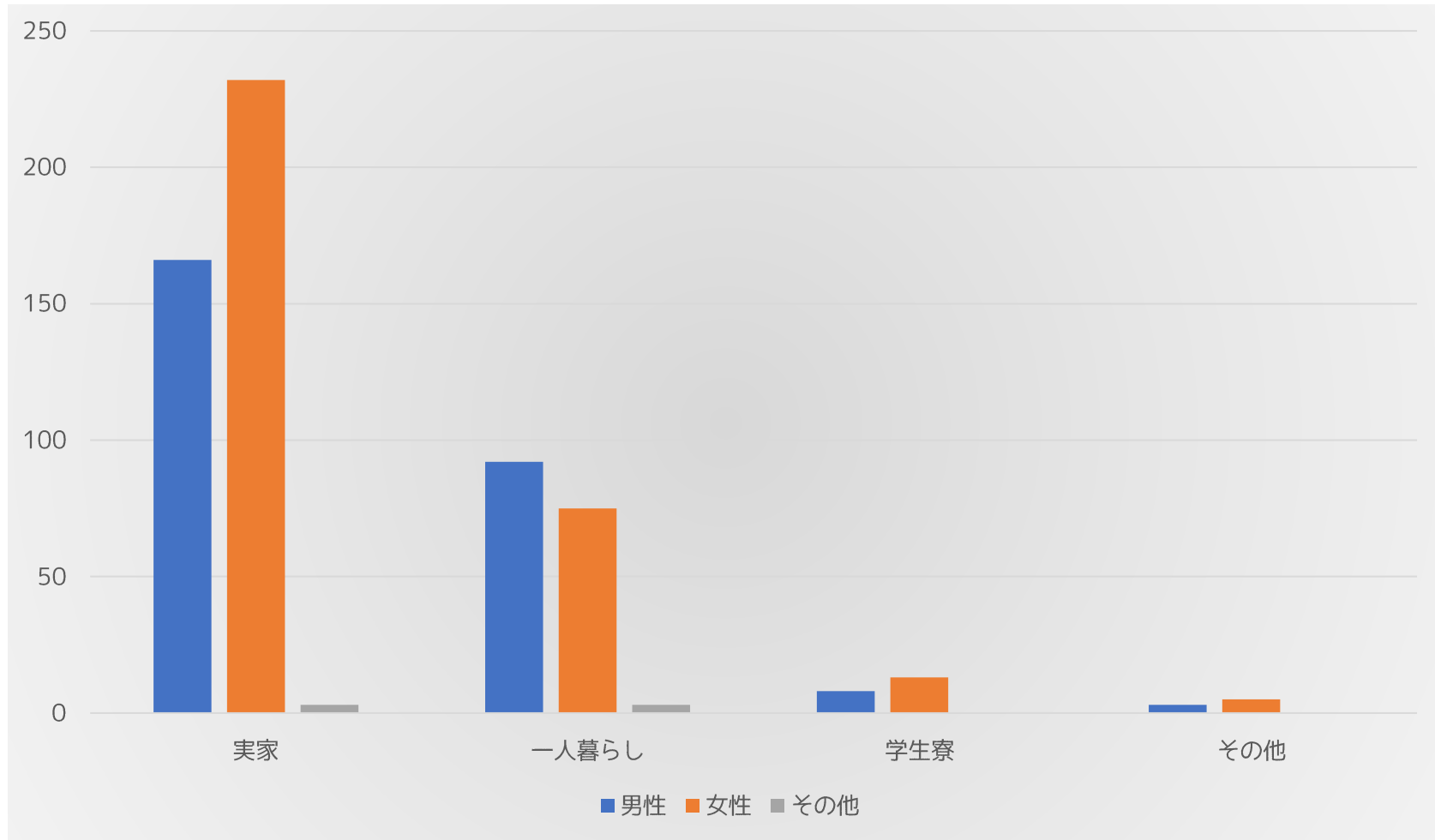
■ 大学卒業後の進路希望

■ 自由記述

■ 入学前に持っていた大学やキャンパスライフに対するイメージ

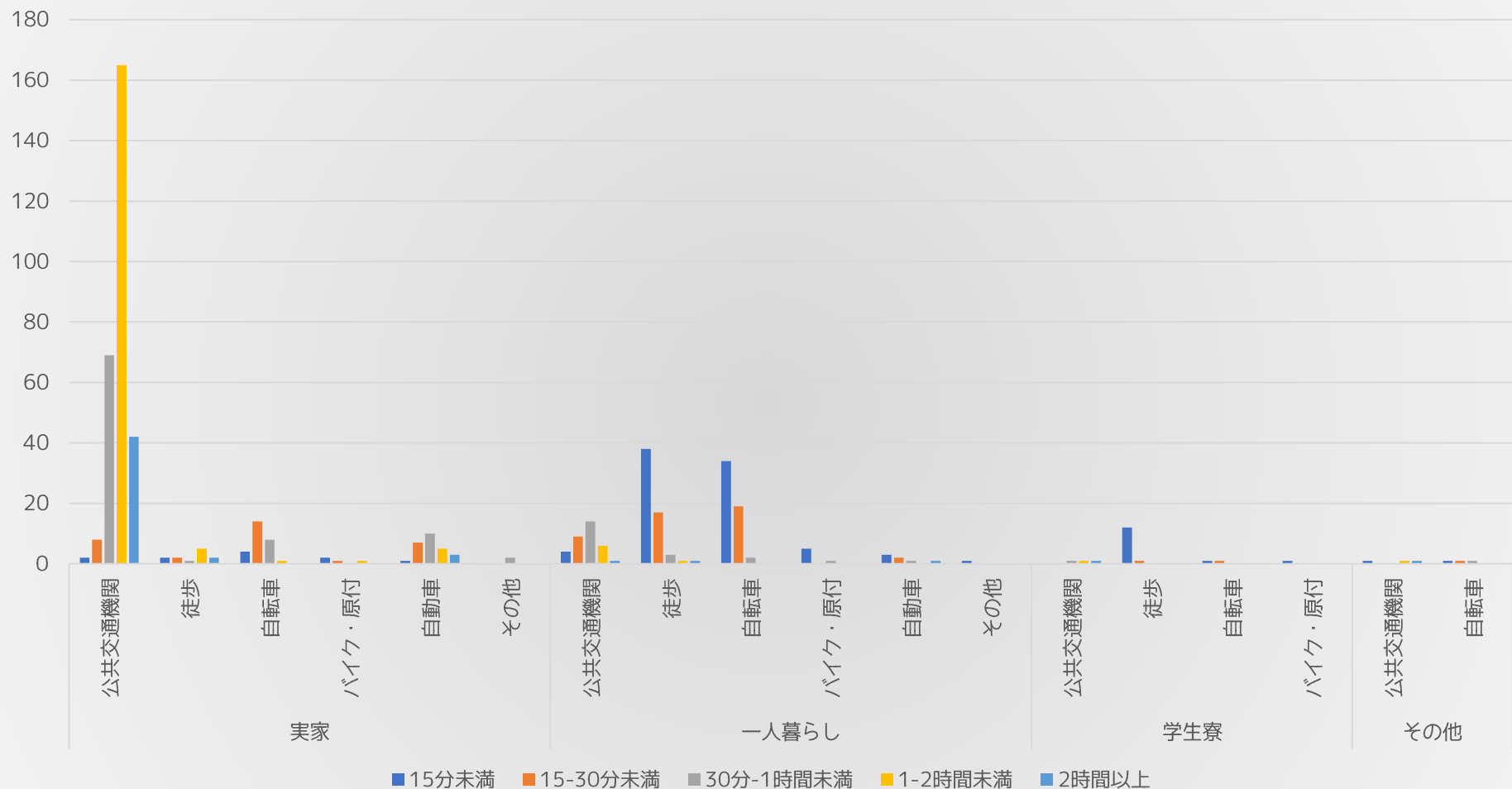
■ 前問で回答したイメージの構築に影響を与えたもの

回答者属性：性別＊居住形態



半数以上が実家暮らし，次いで，一人暮らしが多かった。

回答者属性：居住形態＊通学時間＊通学手段

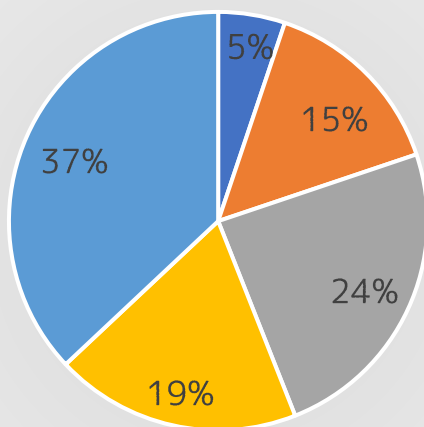


実家暮らしの半数以上が公共交通機関で1～2時間、
一人暮らしの半数以上が徒歩または自転車で30分未満で通学。

回答者属性:

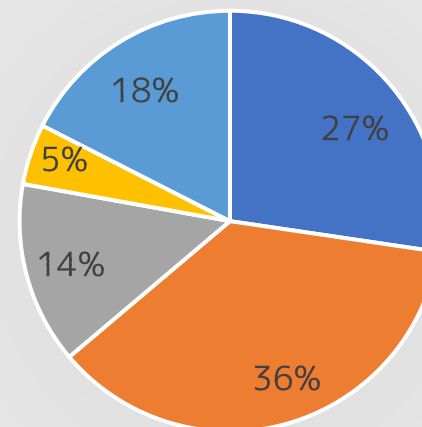
部活やサークル活動(左), アルバイト(右)に従事できたか

部活動やサークル



■ 十分行えた ■ やや行えた ■ あまり行えていない
■ まったく行えていない ■ 所属していない

アルバイト

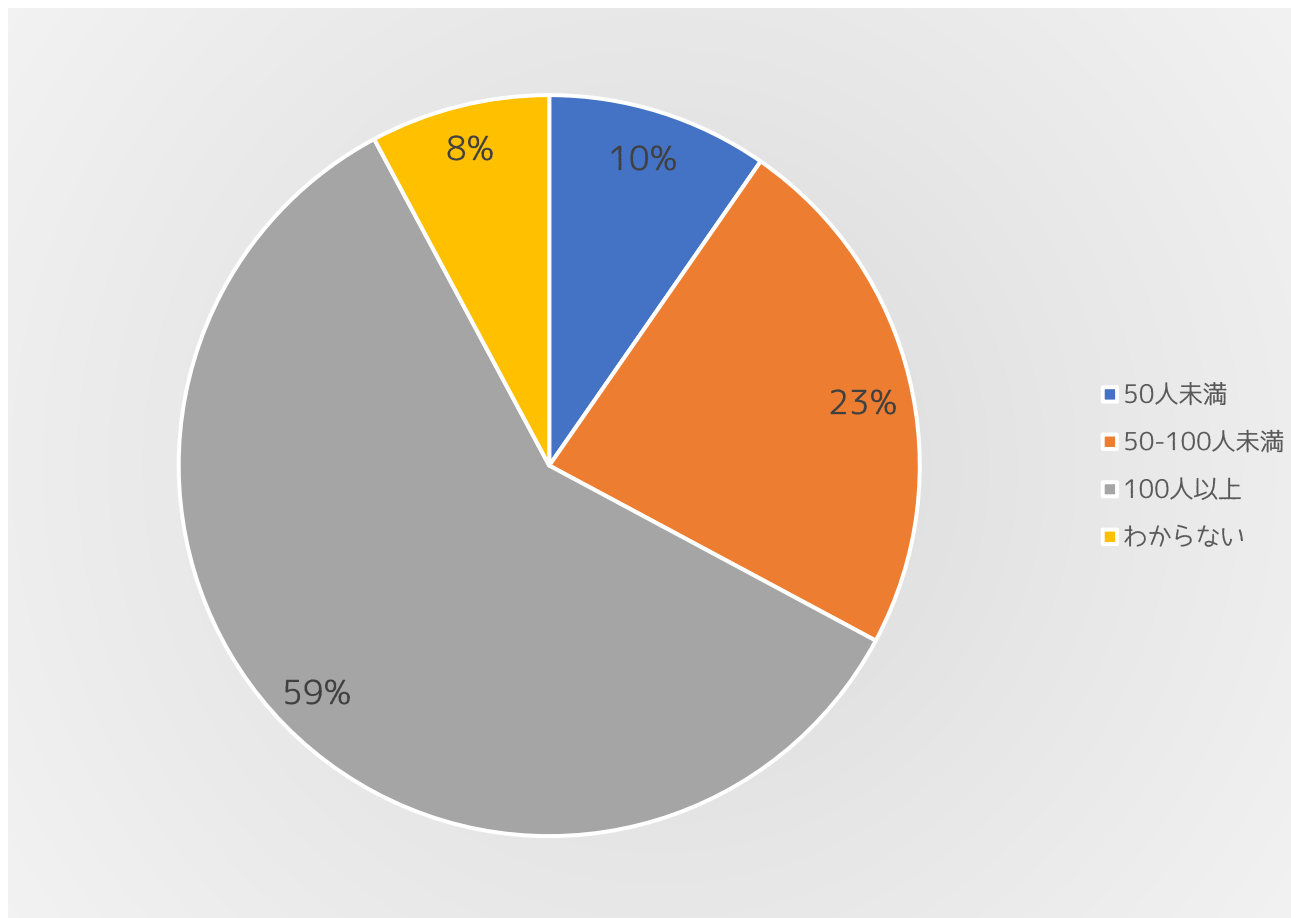


■ 十分行えた ■ やや行えた ■ あまり行えていない
■ まったく行えていない ■ アルバイトはしていない

部活やサークル活動：“所属していない”または“まったく行えていない”が半数以上。

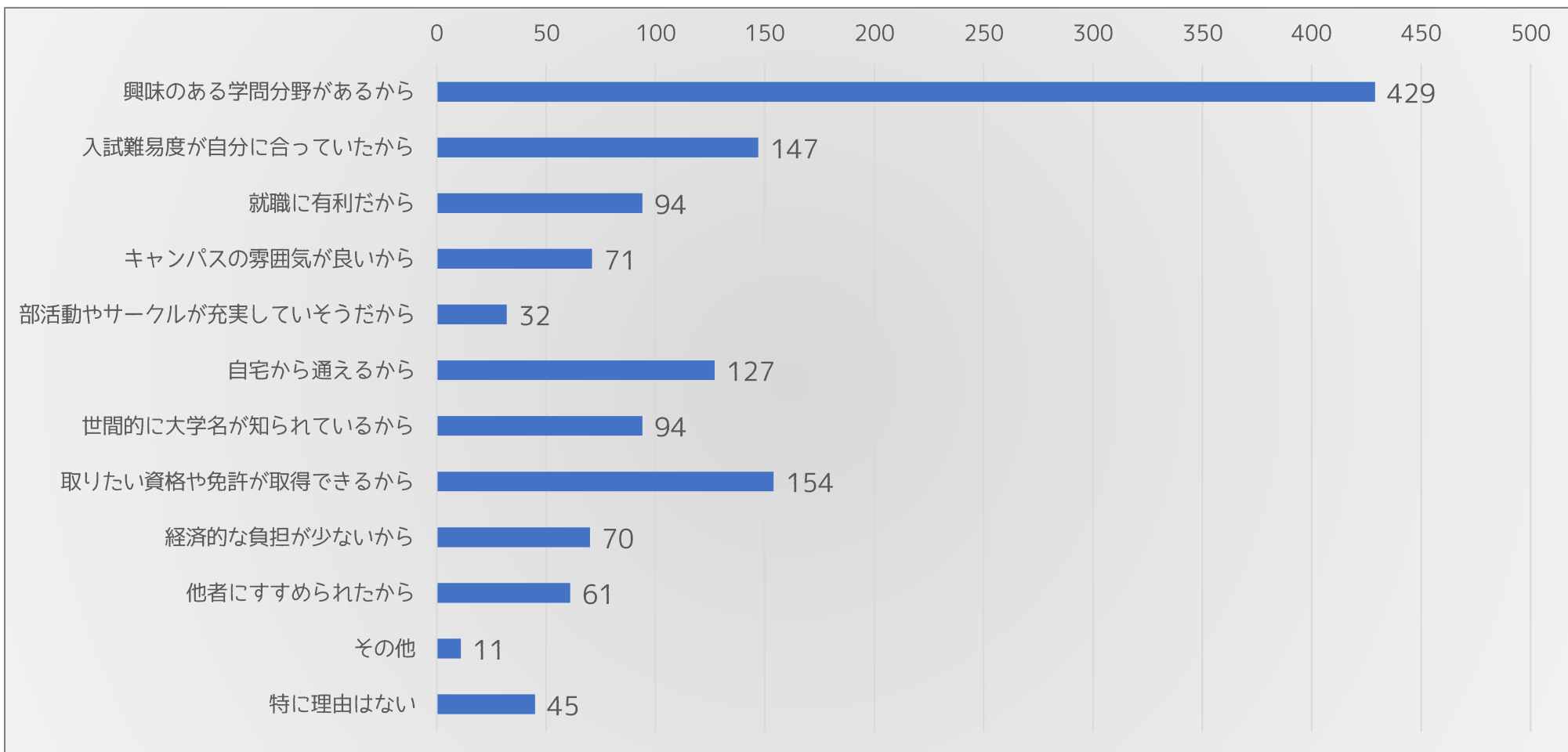
アルバイト：“十分行えた”，“行えた”と回答する者が半数以上であった。

回答者属性：所属学部の1学年の人数



100名以上の規模の学部に所属している者が半数以上。

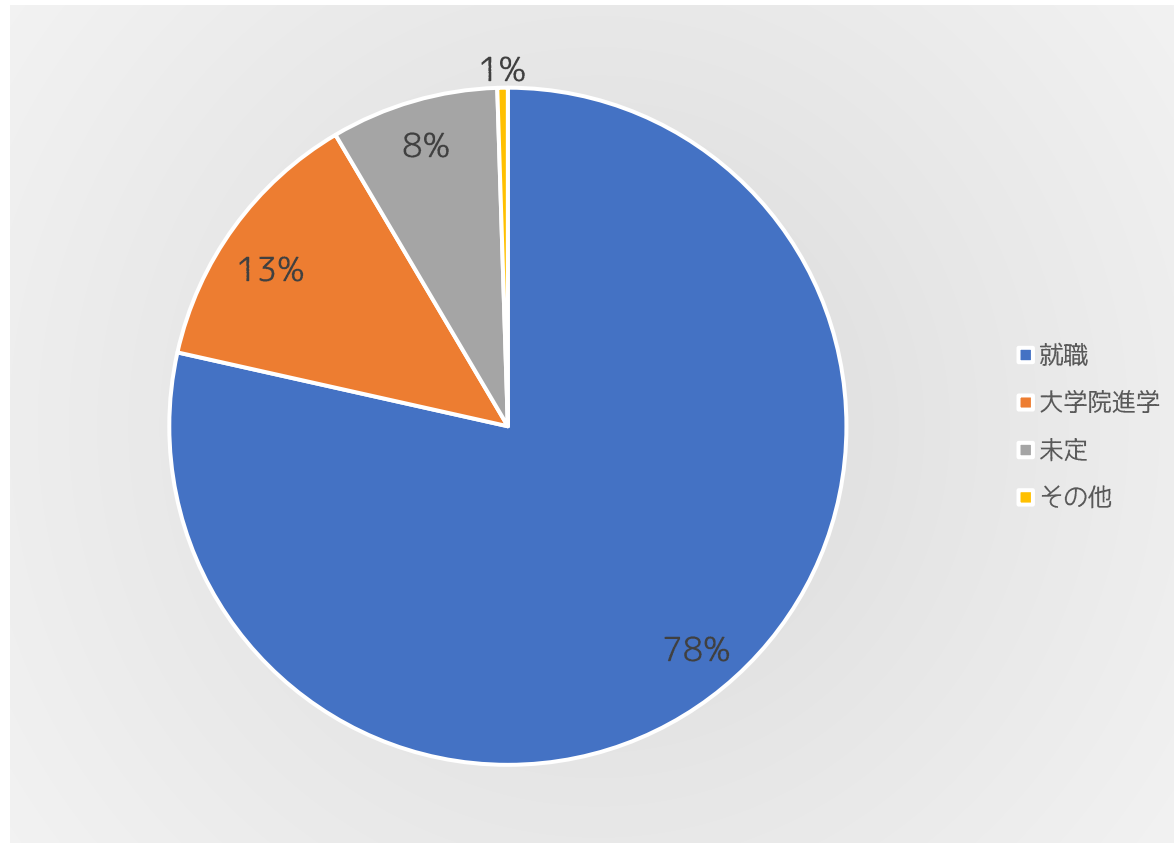
回答者属性：所属大学・学部の志望動機（複数回答）



ほとんどが“興味のある学問分野があるから”と回答。また，“入試難易度が自分に合っていたから”，“取りたい資格や免許が取得できるから”が多かった。

→興味関心以外に、入試難易度や取得可能な資格等が学部を決めるきっかけになっている。

回答者属性：大学卒業後の進路希望

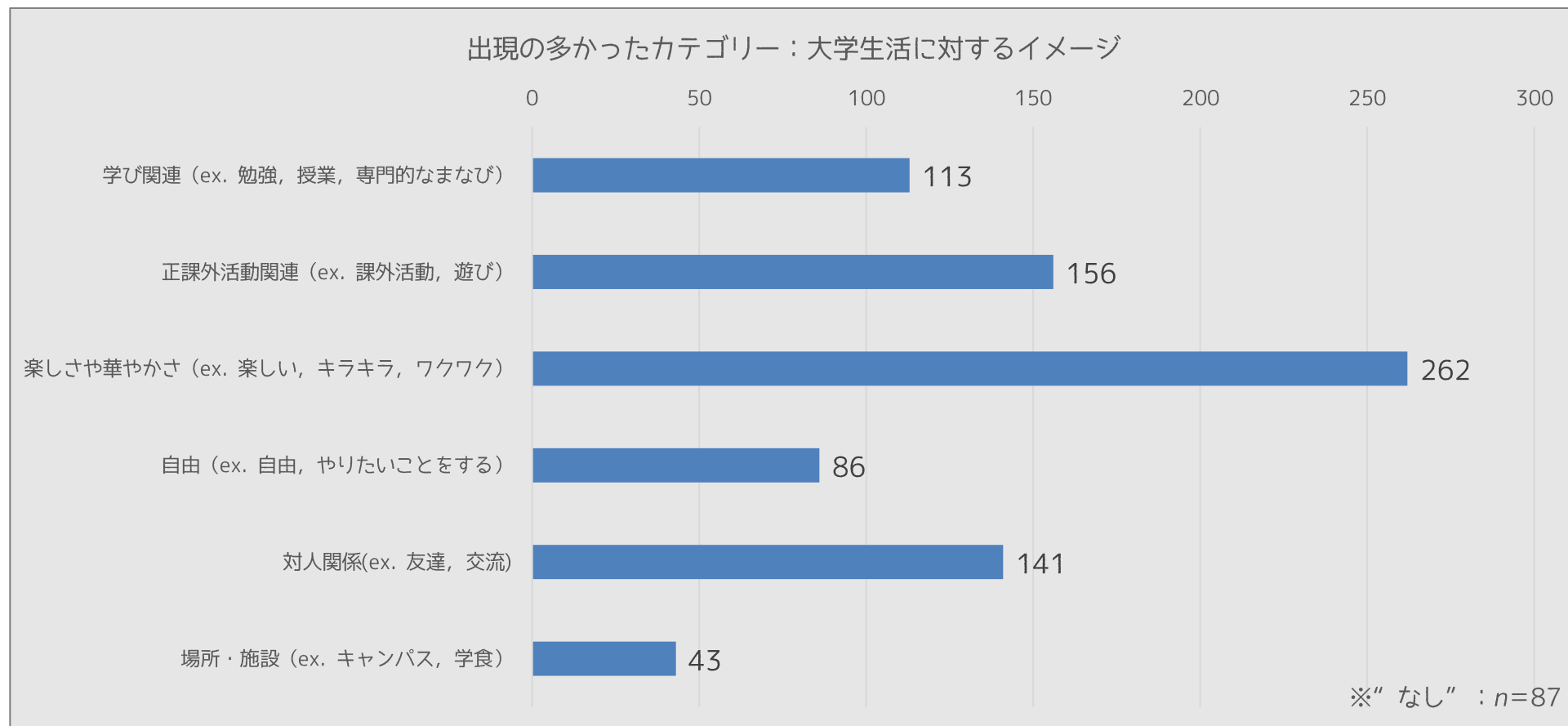


8割近くが就職を希望していた。進学やその他の希望もあった。

回答者属性：

入学前に持っていた大学やキャンパスライフに対するイメージ

■ 自由記述に書かれていることをカテゴリー化し、その出現数を集計した。

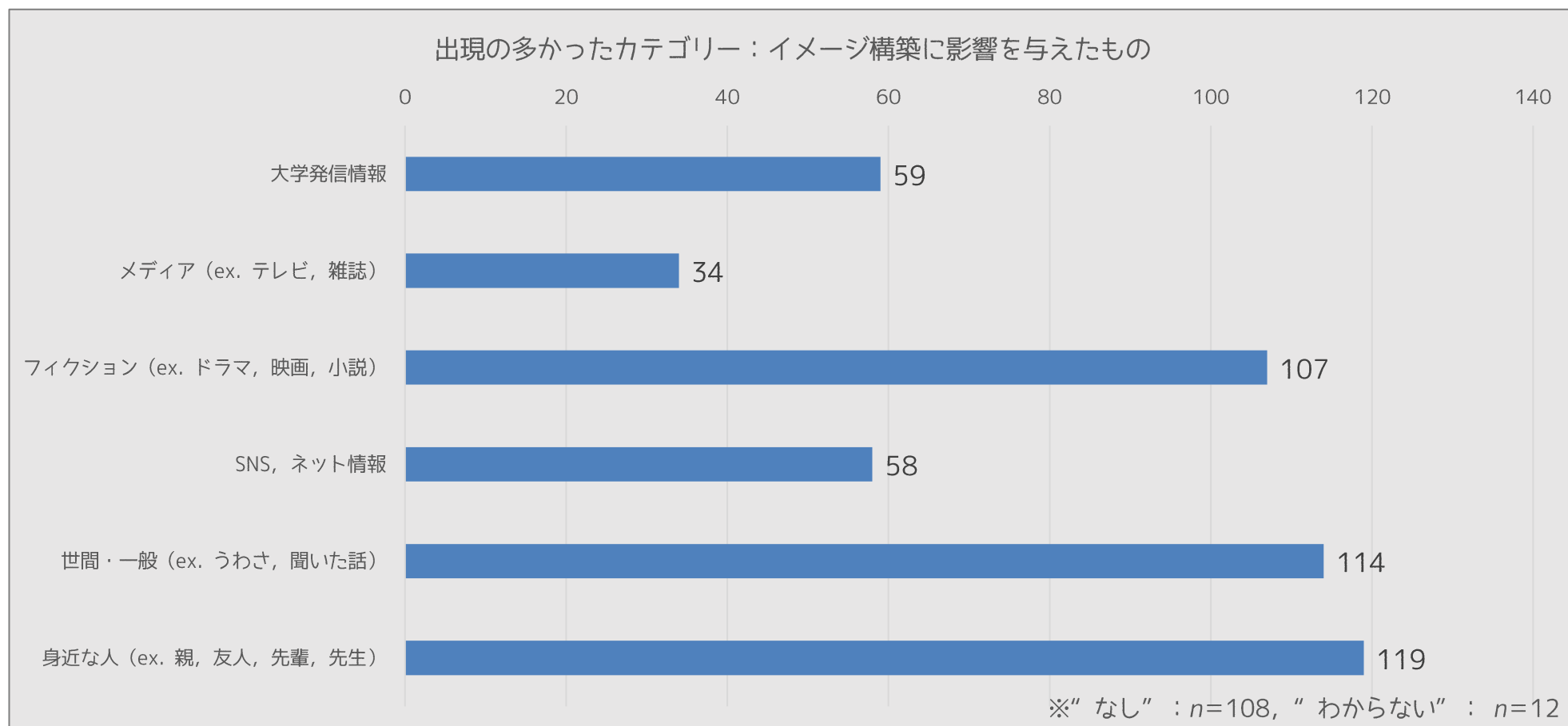


キャンパスライフについて、“楽しさや華やかさ”や“正課外活動”に関するイメージが多かった。“学び”に関するカテゴリーも見られた。

回答者属性：

入学前に持っていたイメージの構築に影響を与えたもの

■ 自由記述に書かれていることをカテゴリー化し、その出現数を集計した。



イメージの構築に影響を与えたのは、“身近な人”や“世間・一般”，
“フィクション”が多かった。

コロナ禍での授業についての結果

■ コロナ禍での授業についての項目：2020年度の授業実施状況やその満足度を把握するために設定した。

■ 数値入力

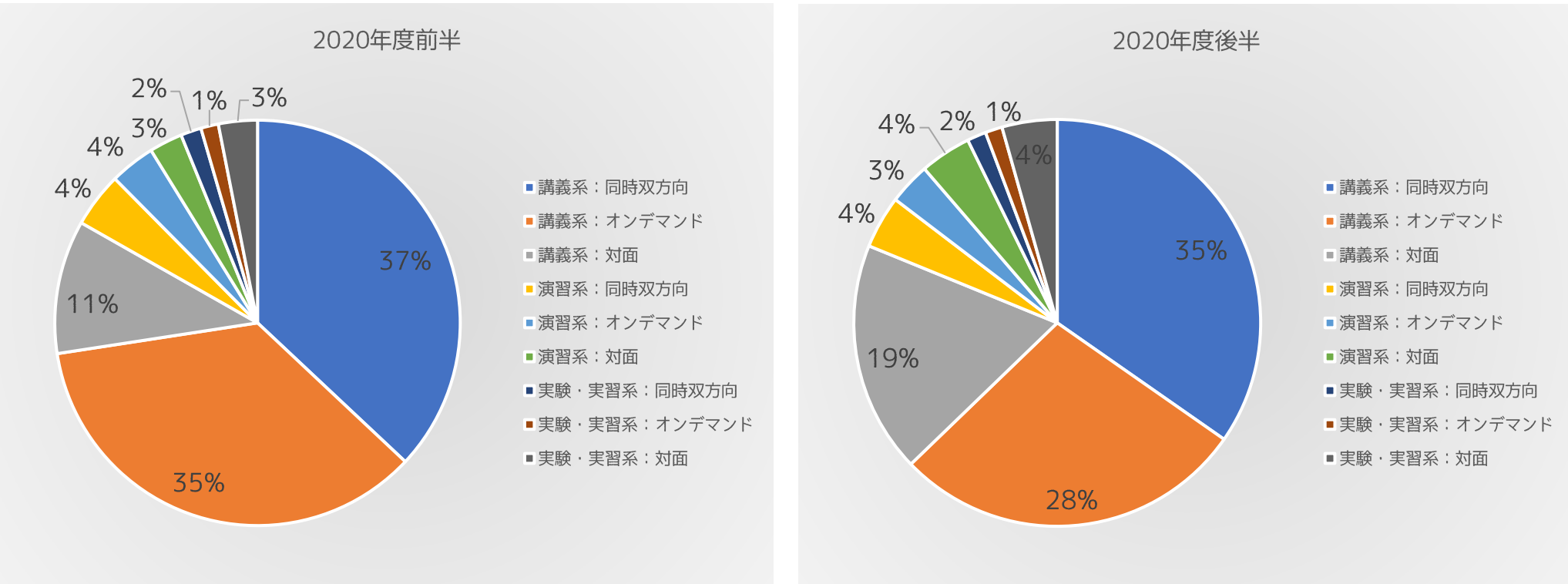
- 大学1年生（2020年度）の前半に履修していた科目数
- 大学1年生（2020年度）の後半に履修していた科目数
- 大学1年生（2020年度）の前半の授業方式・形態別科目数
- 大学1年生（2020年度）の後半の授業方式・形態別科目数

■ 選択式

- 大学1年生（2020年度）の前半の授業形態別満足度
- 大学1年生（2020年度）の後半の授業形態別満足度

コロナ禍での授業：2020年度前半（左），後半（右）の 授業方式・形態別履修科目の割合

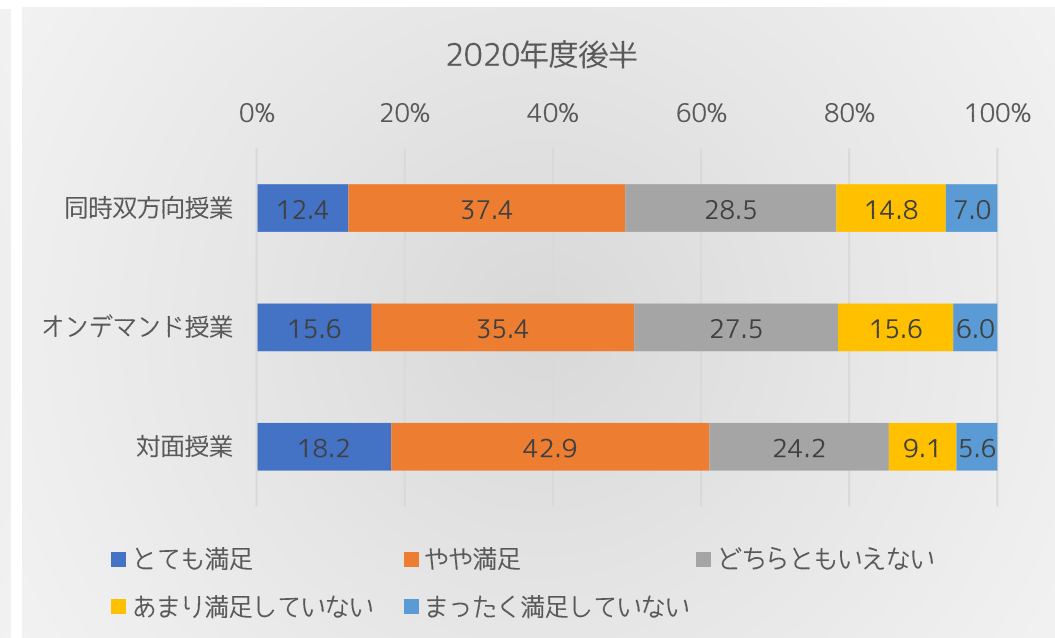
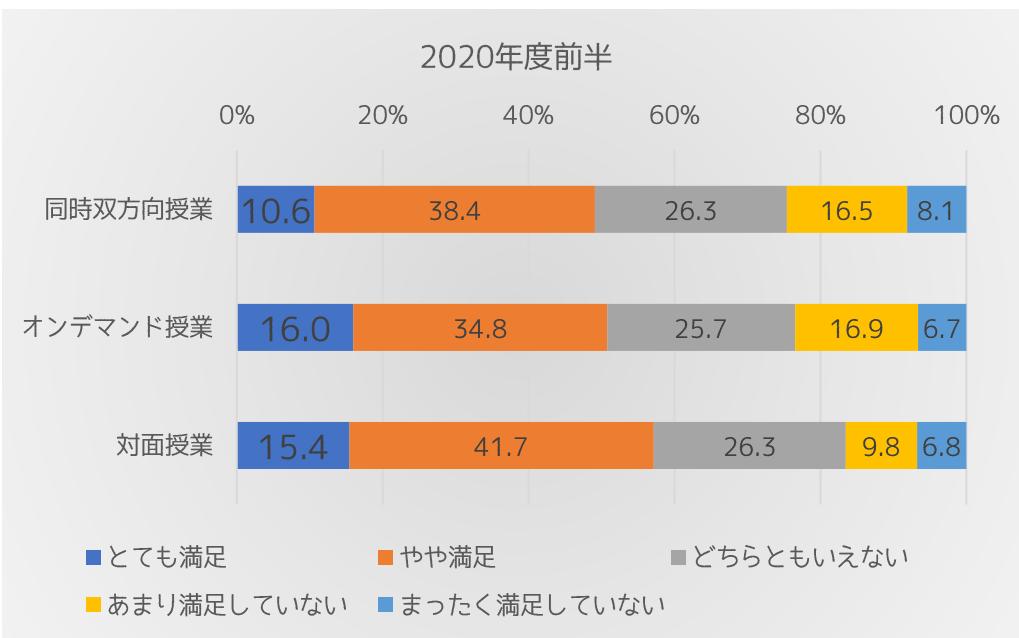
■ 履修科目数に対する授業方式・形態別科目数の割合を算出した。



前半後半とも、講義系の同時双方向とオンデマンドが半数以上。

前半後半でその傾向は変わらないが、後半では対面がどの授業方式においても若干増えている。

コロナ禍での授業：2020年度前半（左），後半（右）の 授業形態別満足度



どの授業形態においても概ね満足していたようだが、
対面授業の方が若干満足度が高かった。

コロナ禍の大学での学びと学生生活についての結果

■ コロナ禍の大学での学びと学生生活についての項目：大きく分けて，“大学での学び”と“学生生活”について、どれくらいコロナ禍でそれらを経験し、コロナ禍の影響を受けたのかを把握するために設定した（学生生活についてはその重要度も尋ねた）。すべての項目が選択式であった。

■ 大学での学び

- コロナ禍での経験度

- コロナ禍の影響度

■ 学生生活

- 重要度

- コロナ禍での経験度

- コロナ禍の影響度

コロナ禍の大学での学び：経験度とコロナ禍の影響度

項目	度数	最小値	最大値	経験度 ^a		コロナ禍の影響度 ^b	
				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
大学の教員の教え方は上手だと感じた	600	1	5	3.16	0.99	3.35	1.04
授業では、教員の専門性を感じられた	600	1	5	3.62	1.03	3.16	1.07
教員と学生との距離が近いと感じた	600	1	5	2.73	1.12	3.55	1.10
大学教員から、教育に対する意欲を感じられた	600	1	5	3.17	1.01	3.29	1.01
内容に満足していく授業が多いと感じた	600	1	5	3.06	1.03	3.40	1.04
授業時間が有意義であると感じる内容の授業が多かった	600	1	5	3.08	1.03	3.38	1.04
一方的に大学教員が話をするだけの授業は少ないと感じた	600	1	5	2.74	1.06	3.42	1.09
以前と比べて、授業を通じて自分の関心が広がったと感じた	600	1	5	3.25	1.03	3.18	1.04
自分の将来に対して役立つ授業が多いと感じた	600	1	5	3.37	1.02	3.15	1.03
授業を通じて幅広いことを学ぶことができると感じた	600	1	5	3.48	1.00	3.20	1.06
興味を持てる授業が多いと感じた	600	1	5	3.36	1.03	3.13	1.08
授業をきっかけに、自分で深めたいと思うような授業が多いと感じた	600	1	5	3.29	1.00	3.17	1.03
自分で勉強する時間がとれると感じた	600	1	5	3.26	1.05	3.44	1.07
授業やその課題が多いと感じた	600	1	5	3.67	1.07	3.54	1.10
単位を修得することは簡単だと感じた	600	1	5	3.23	1.04	3.40	1.07
授業を自由に履修することができると感じた	600	1	5	3.35	1.12	3.18	1.10
履修する授業を選択するための情報が充実していると感じた	600	1	5	3.11	1.05	3.29	1.05
大学はカリキュラムが充実していると感じた	600	1	5	3.30	0.96	3.12	1.07
自分の専門とは関係ないことを多く学ばなければならないと感じた	600	1	5	3.29	0.99	3.09	1.09
大学の授業は、高校までの授業と違うと感じた	600	1	5	3.79	1.00	3.19	1.10
大学の学びの環境は、高校とは違うと感じた	600	1	5	3.77	1.02	3.25	1.12
基礎的な内容は多くなく、専門的なことが学べると感じた	600	1	5	3.31	1.00	3.06	1.10
高校よりも教わる内容のレベルが高いと感じた	600	1	5	3.59	0.99	3.07	1.08

注) a), b)の各項目に対して、以下のように回答をもとめた。

a) 1:まったくあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:どちらともいえない, 4:ややあてはまる, 5:とてもあてはまる

b) 1:まったく影響を受けなかった, 2:あまり影響を受けなかった, 3:どちらともいえない, 4:やや影響を受けた, 5:とても影響を受けた

コロナ禍において、大学の学びをある程度は経験できていたが、教員との距離がある、また一方的に大学教員が話をする授業が多いと感じられていたようである。また、大学の学びについてコロナ禍の影響を受けたと感じる割合は高かった。

コロナ禍の学生生活：重要度，経験度とコロナ禍の影響度

項目	度数	最小値	最大値	重要度 ^a		経験度 ^b		コロナ禍の影響度 ^c	
				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
気楽な大学生生活	600	1	5	3.69	1.00	3.22	1.17	3.85	1.07
ゆとりのある大学生生活	600	1	5	3.82	0.92	3.27	1.17	3.86	1.02
楽しい大学生生活	600	1	5	4.01	0.98	2.93	1.22	3.93	1.09
充実したキャンパスライフ	600	1	5	3.97	1.00	2.69	1.26	4.02	1.05
遊ぶ時間	600	1	5	3.91	0.97	3.30	1.18	3.83	1.09
自由な時間	600	1	5	4.03	0.94	3.48	1.18	3.77	1.13
大学でのいろいろな行事への参加経験	600	1	5	3.51	1.16	2.35	1.27	4.02	1.08
コンパや食事会への参加経験	600	1	5	3.15	1.24	2.18	1.25	3.94	1.18
大学が提供する活動（例：インターンシップ、ボランティア等）への参加経験	600	1	5	3.43	1.09	2.26	1.23	3.83	1.15
自発的な活動経験	600	1	5	3.46	1.07	2.60	1.22	3.66	1.17
サークル・部活動への参加経験	600	1	5	3.49	1.23	2.56	1.35	3.93	1.15
アルバイト経験	600	1	5	3.88	1.02	3.44	1.30	3.52	1.23
学部を越えた学生間の交流	600	1	5	3.38	1.16	2.46	1.26	3.88	1.16
授業時間外での大学教員との交流	600	1	5	3.28	1.10	2.35	1.25	3.88	1.14
大学の先輩との交流	600	1	5	3.47	1.14	2.48	1.30	3.90	1.14
親しい友人	600	1	5	3.95	1.00	3.15	1.25	3.85	1.14
サークル・部活動の交友関係	600	1	5	3.51	1.18	2.57	1.33	3.87	1.18
人脈	600	1	5	3.77	1.07	2.72	1.26	3.92	1.10
異性の友人	600	1	5	3.46	1.15	2.61	1.27	3.80	1.17

注) a), b)の各項目に対して，以下のように回答をもとめた。

a) 1：まったく重要ではなかった，2：あまり重要ではなかった，3：どちらともいえない，4：やや重要だった，5：とても重要だった

b) 1：まったく得られなかった，2：あまり得られなかった，3：どちらともいえない，4：ある程度得られた，5：非常に得られた

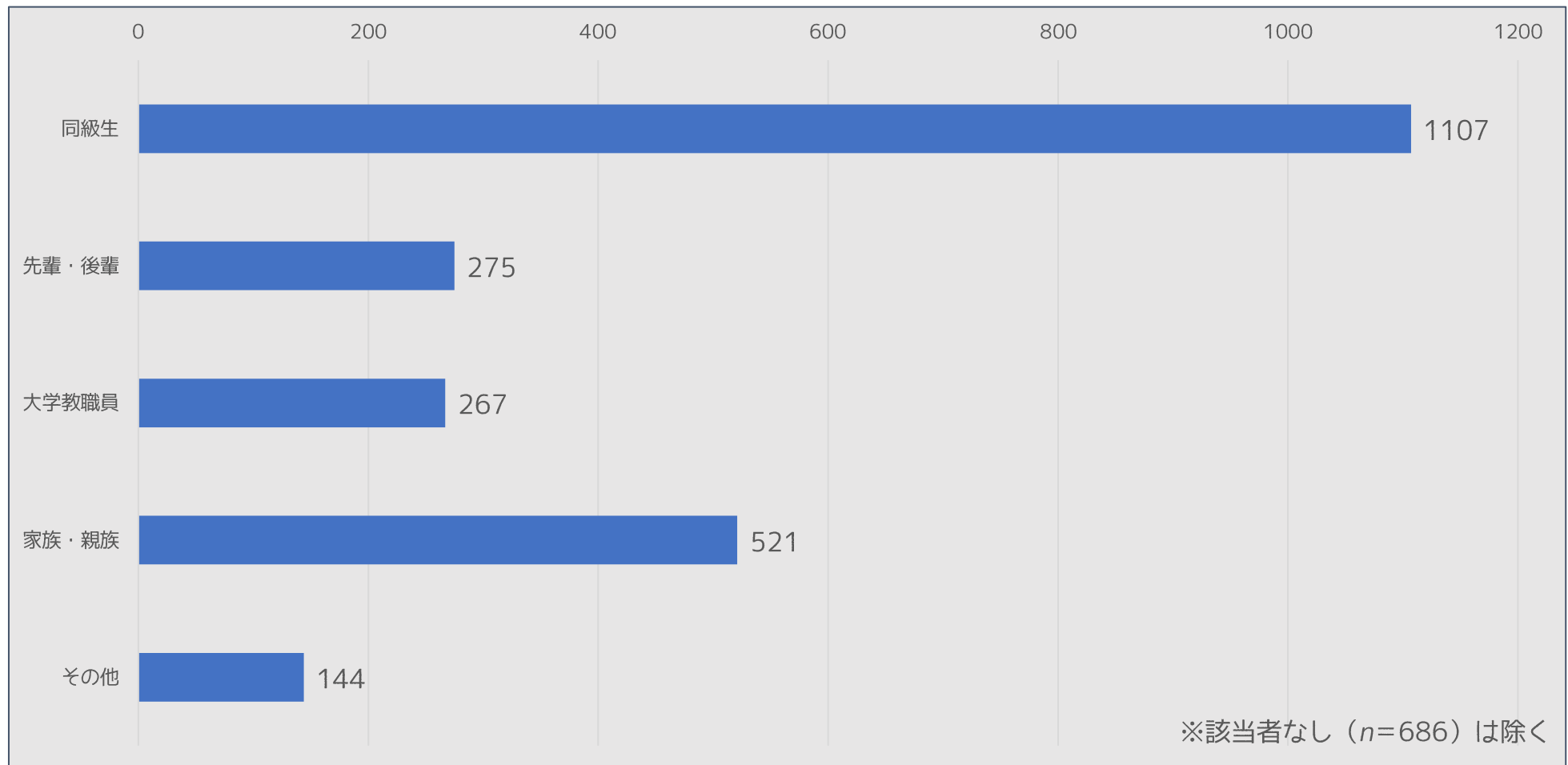
c) 1：まったく影響を受けなかった，2：あまり影響を受けなかった，3：どちらともいえない，4：やや影響を受けた，5：とても影響を受けた

大学生生活は“自由な時間”があり，“楽しい”ことが重要視されている。コロナ禍では，前者は得られたようだが，一方後者は得られなかったようである。特に“充実したキャンパスライフ”や“大学でのいろいろな行事への参加経験”がコロナ禍の影響を受けていたようである。

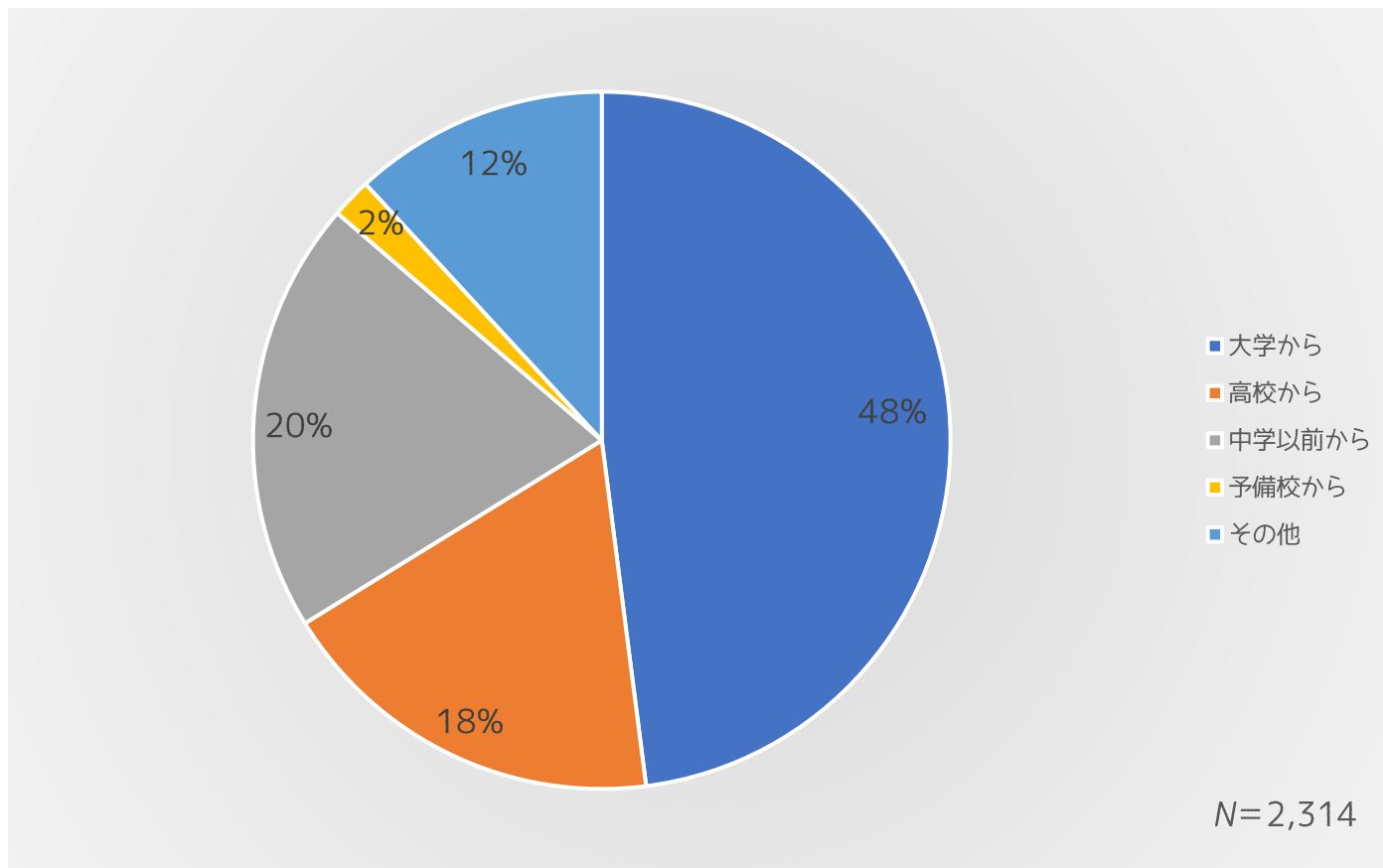
コロナ禍での人間関係についての結果

- コロナ禍での人間関係についての項目：大幅に活動制限されたコロナ禍で、どのような他者と、どのようにコミュニケーションをとっていたのかを把握するために設定した。
 - 大学1年生の時（2020年度）、大学での学びや大学生活について話す機会が多かった人物を最大5名思い浮かべ、その人物（たち）に対する以下の項目について回答を求めた。
 - 関係
 - 知り合った時期
 - 知り合った場所（時期で“大学から”を選択した場合のみ回答）
 - やりとりする手段
- なお、結果は、上記項目毎に1～5名内に挙げられた人物に対する回答を合算して集計したものを示している。

コロナ禍での人間関係： 大学での学びや大学生活について話す機会が多い人物との関係



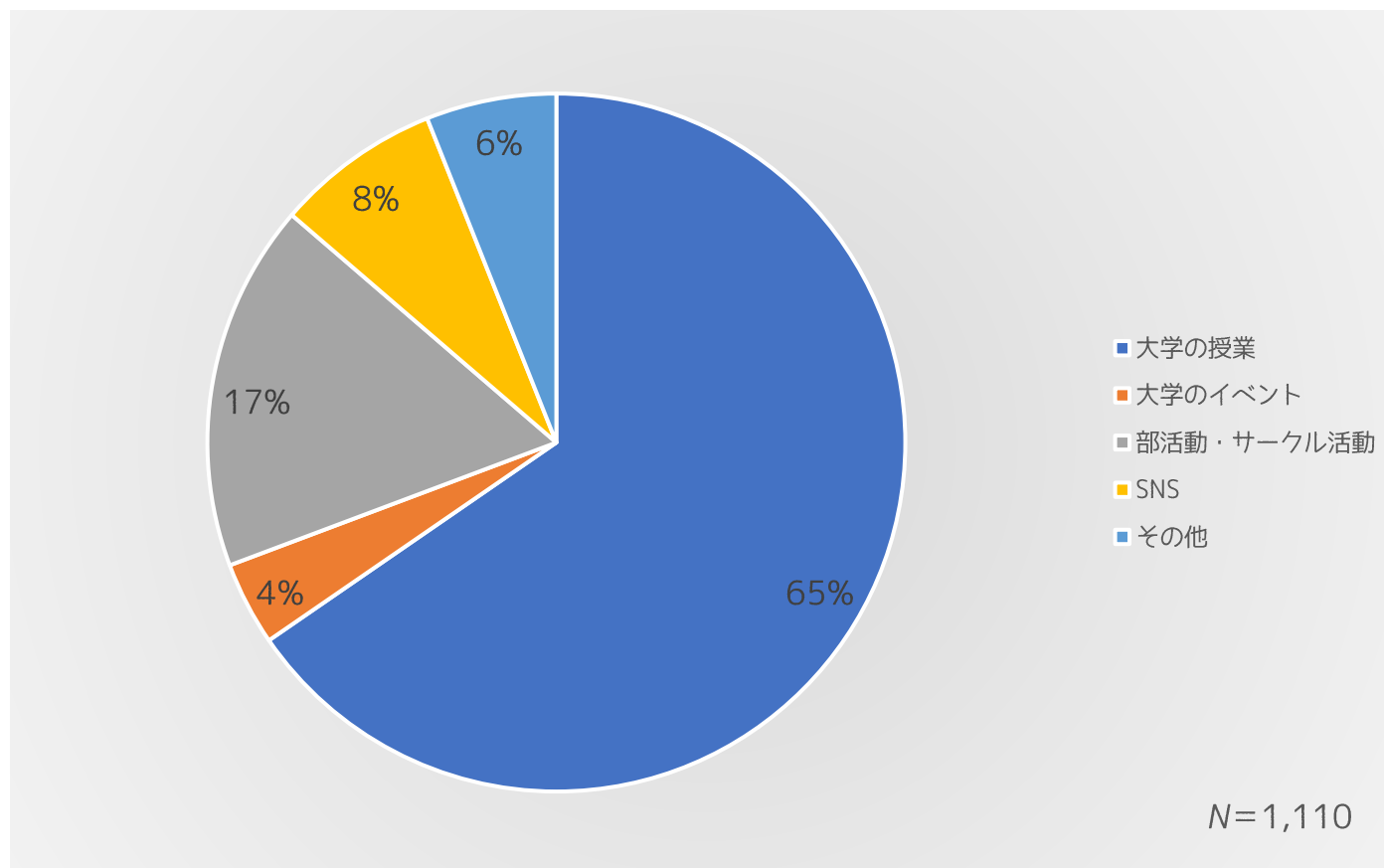
最も多かったのは同級生であったが、
次いで“家族・親族”も多かった。



知り合った場所については、“大学から”が最も多かったが、大学以前という回答も多かった。

コロナ禍での人間関係：

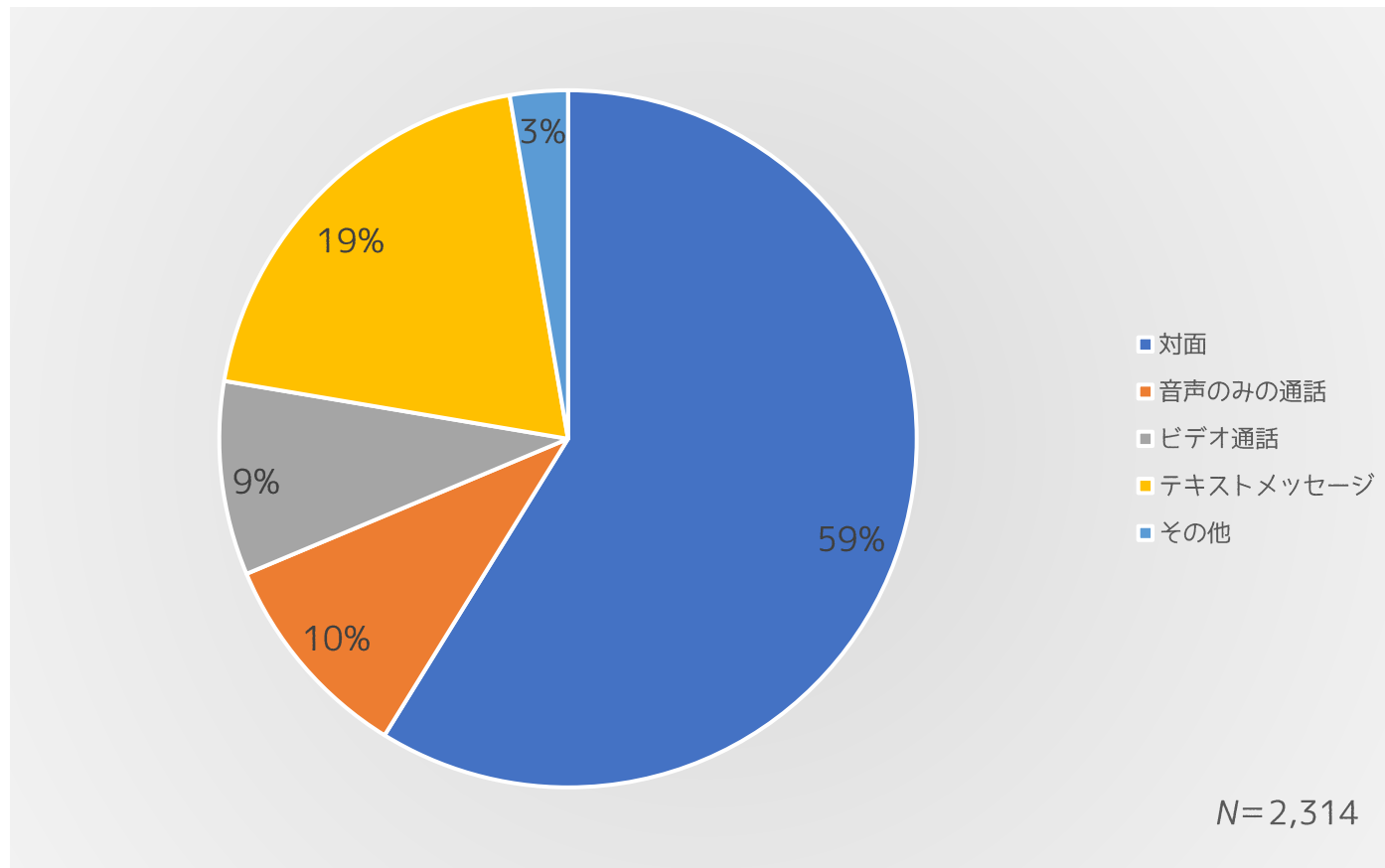
話す機会が多い人物と知り合った場所 (時期で“大学から”を選択した場合のみ回答)



知り合った場所は，“大学の授業”が6割以上。

コロナ禍での人間関係：

話す機会が多い人物とやりとりする手段



やりとりする手段としては、“対面”が約6割，オンラインツールでのやりとりが4割近くであった。

結果のまとめ

■回答者属性

- 公共交通機関で1～2時間圏内の実家暮らしが大半。
- 部活やサークルは活動できていない者が多かったが、アルバイトはある程度行っていたようである。
- 100名以上の大規模学部には所属している者が半数以上。
- 志望動機は学問分野への関心や免許・資格取得が多く、大半が就職希望。
- 入学前大学に対して、“楽しさ・華やかさ”，“正課外活動”や“対人関係”についてのイメージをもつものが多かった。
- また、イメージの構築に影響があったものは“身近な人”や“世間・一般”，“フィクション”などが多く、直接的な大学からの発信以外のものであった。

■コロナ禍での授業

- 前半後半いずれも、講義系の同時双方向とオンデマンド型が多かったが、後半は対面も増えたようである。
- 前半後半ともに、いずれの授業形態でも満足している者が半数であった。

結果のまとめ

■コロナ禍の大学での学びと学生生活

- 大学の学びは、平均的には得られていた。“教員が一方向的に話す授業”は多いと感じられていた。またコロナ禍の影響は大きいと感じられていた。
- 学生生活でもっとも重要だと感じられていたのは、“自由な時間”と“楽しさ”であったが、“楽しさ”の経験は得られていなかった。大学での学びと同様、コロナ禍の影響は大きかったようであるが、特に大学やキャンパスでの対面での経験に影響が大きいと感じられていた。
- 大学での学びはある程度経験されていたようだが、大学生活の多くは経験されていなかったようである。

■コロナ禍での人間関係

- 大学での学びや大学生活について話す機会が多かった人物は“同級生”であり、大半は、大学の授業で知り合った者が多かったようである。
- 一方で、“部活やサークル活動”や“大学のイベント”で知り合った者は少なかった。
- また、家族・親族も話す機会が多い人物に挙げられており、やりとりの手段は“対面”がもっとも多く、“オンラインツール”も使用されていた。